

実は私は、この東大見学会をあまり心待ちにはしていなかった。なぜなら、自分で希望はしたものの、いざガイダンスを受けてみると企業大学訪問先は自分たちで決め、アポイントメントを取らなければならない。また、今書いている作文の提出がある。と、自分にこれら事ができるのか自信がなかったからだ。そして、辞退しようと両親に相談をもちかけたとき、両親は言った。

「あなたがやめたいのならやめればいい。ただこんな貴重な体験は絶対将来のあなたの役にたつと思う。面倒だから、出来ないから、と言う理由で辞めるのは自分のためにならないよ。一步踏み出して、今だからできる体験を試してみるのもいいんじゃない?」と。不安は大きかったが、ガイダンスを何回か受ければ気持ちが変わるかもしれないと、東大見学会に行くことを決意した。

何度かの話し合いを重ね、先生の助言もいただき、『協和発酵キリン株式会社東京リサーチパーク』に行くことが決定した。ここは、医療用医薬品の製造・販売を行い、医療事業を核として、バイオケミカル事業などを展開している会社である。将来薬剤師になりたいと思っている私にとって、とても興味のある研究所であるため、たくさんのことを吸収しようと思っていた。

そして、いざ出発。

ついたらまずはディレクトフォースが待っている。東京駅をあとにして少し歩くと、とても立派な建物がそこにはあった。ガイダンスの際、本社には一度も立ち入ることなく退職される方も少なくないと聞いていたため少し緊張していたが、ディレクトフォースの方々は我々をとても温かく迎えてくださった。

私が訪問した先は、新日鐵住金株式会社である。新日鐵住金株式会社は素材メーカーといい、メーカーに「素材」を供給する会社だ。企業別では第2位を誇る生産量だそうだ。ここでは、新日鐵住金株式会社に勤めていらっしゃる4人の人生の先輩方のお話を聞いた。

まず1人目は、パイプ営業。国内外のメーカーへの営業が主な仕事だそうだ。新車発売の前にお客様と共に開発を進め、それぞれのニーズに合うオーダーメイドの最高品を提供している。また、受注獲得に向けて、自分の会社の商品開発力、グローバル対応力、設備力、ソリューション提案力を存分に生かしたプレゼンができるように全力を尽くしている。この仕事は誰も正解がわからない。だからこそ、仲間と最良のものを追求しあえるという面白さがある。とおっしゃっていた。

2人目は、国内法務。これは主に、戦略法務(投資案件の法的サポート)、予防法務(トラブル防止の契約書作成)、臨床法務(起こったトラブルの解決、訴訟対応)の3つ分けられる。社員のチームプレイで素早い対応が求められるので、社内関係者との一体感が高まり、まとまったときには達成感が味わえるそうだ。

3人目は、技術関係。技術関係にも種類がある。製造技術と呼ばれる、新商品の開発に努める仕事と、利用技術と呼ばれる、より良い使い方をPRする仕事だ。どちらの仕事をするにも、学生時代の仲間を大切にする気持ちと文武一道という言葉が今の自分を後押ししてくれているそうだ。

4人目は、広報センター。会社の企業価値や株価を高める戦略的な広報活動をしている。また、会社の認知度をあげるための報道対応や、出版物・広告の企画制作、HPの管理など様々なことを行っている。

私は今、北陵祭実行委員の広報部として活動している。広報部では、北陵祭の宣伝を行うために性別や年齢を問わず、たくさんの人と関わる機会が多くある。私はこの活動をしていて意識していることが3つある。

1つ目は、マナーについてだ。これは普段の学校生活における先輩方や先生方との関わり合いの延長である。この日々の小さなことを怠ってしまうと、将来、マナーがなっておらず苦労し他社との良い関係を築くことが出来なくなってしまう1つの原因となるだろう。私は中学から高校に進学して、高校では中学の頃とは比べ物にならないぐらいの人数が一学年にいることに衝撃を受けた。まして、仙台第二高等学校ともなると、東北で1番の学

力を持っている優秀者ぞろいだ。

将来、彼らはきっと何らかの形で日本を背負っていく人材となることに違いはない。そんなみんなと学生の頃に親しくなれば、将来私がなにか物事をしようと動き出した時の助けになると思う。もしかしたら、私が誰かの支えになれるかもしれない。高校でこんなにもたくさんの人とコミュニケーションをとる機会があるのならば、大学に入学したときにはもっとたくさん的人数と関わるのが可能となる。この大きなチャンスを無駄にすることないように、学生の頃みんなとコミュニケーションをはかり、人脈を広くしておくことは将来に繋がる大切なことではないかと考える。

2つ目は、計画を立てて準備することだ。仕事には締切がつきものだ。だけれども、時間は誰にでも平等に与えられている。その時間内でいかに物事を順序よく成し遂げられるかが大切ではないだろうか。

そのためには、筋道立てて物事を考える必要がある。目先のものにとらわれることなく、遠くを見つめて将来に向けて今しなければならぬことと、長い時間を掛けてしなければならぬことの判断をつけ、効率よく作業を行うべきだ。だが、いくら計画を立てて万全の準備をしても、予期せぬトラブルは起こってしまう。そのとき、そのトラブルに動じることなく、状況にあった適切な判断をくださるようにしなければならない。そのためには訓練が必要となる。日頃から予想外のことに臨機応変に対応できるようにたくさんの経験を積んでおく。そうすれば、トラブルが発生したときも冷静に対処し、効率よく作業を行えると思う。

3つ目は、自己相対化についてだ。集団生活をしているにあたって、全員の意見が一発で一致するという事は極めて少ない。そんなとき重要となる心構えは、自分がいつも正しいわけではない。ということだ。もちろん自信がなければ議論することはできない。が、自分に対する反対意見を受け入れるという姿勢がなければ、議論はただの対立になってしまい何も生まれない。受け身の体勢があるからこそ、より良いものが生まれるのではないだろうか。この、周りを広い視野で見わたし周囲の人の意見を聞き入れることで、自己相対化をはかることができる。もう高校生になり、数年後には社会に出る身として、他者を尊重するという事は当然でなければならないことだと思う。社会生活を円滑に進めるとも重要なポイントとなってくるはずだ。

そんな人生における大事なことを学んだあとには、待ちに待った企業大学訪問。施設はとても開放的で、新しく、はたらきやすそうな研究所であった。

協和発酵キリン(株)東京リサーチパークでは、薬のもととなるタネの探索研究を行っている。探索には2~5年の年月を費やし、いい標的となるものを見極めている。東京リサーチパークでは行われていないが、探索が行われたあと、開発研究で4~7年かけて薬の効き目の確認、安全性の確認が行われる。その後、厚生労働省による厳しい審査がされたのちに、承認され、製造・販売にいたる。この一例の流れには、約10~15年かかり、数百億の資金を費やし、100人もの方が開発を支えているそうだ。

薬のタネの探索研究と聞くと、ずっと研究室にこもりっぱなし。というイメージがついてしまいがちだ。しかし、そんなことは全くなく、お話を伺った方は30歳のときに、ステップアップ休暇を利用して海外にホームステイしたそうだ。そこでの経験が彼の世界を広げ、研究チームのメンバーやお医者さんだけでなく、外国のパートナーとの関わりをもたせてくれた。とおっしゃっていた。

いろいろな話をきいたり、いろんなものに触れて、挑戦してみたりすることで視野が広がり、それと同時に未来への可能性も広がると学んだ。

今回の東大見学会では、普段なかなか会えないような二高のOBOGの方からのお話を伺うこともでき、将来に向けてや勉強法、女の子ならでのことなどためになる話ばかりであった。最初の頃の気持ちなんて嘘化のように、東京に来て損は全くない。むしろもっとお話をききたいから帰りたくないと思っただけ(笑)

だが、ふと考えてみると、そんな素晴らしいお話ができるのも、日頃の努力が、体験があるからだ。この2日間で学んだことを、これだけに止めず自分の中で噛み砕いてよく理解し、自分のモノにして今後の生活で存分に発揮したい。